

やまなし女性の知恵委員会

「はぐくむ」グループ

地域で はぐくもう

～未来に向けて、地域連携～

提案

世界にも通用する人材育成

みんなの情報

みんなの新図書館

はじめに

今の子どもたちを取り巻く家庭、社会はどうなっているのでしょうか。児童虐待のニュースを聞かない日はなく、孤独な子育ての現状、子どもの置かれている厳しい現状が浮かんできます。また、雇用の不安、少子高齢化、核家族化等、社会にも様々な問題があり、子どもたちが大きくなったときにはどのような社会になっているのか不安になることがあります。

このような変化の大きい社会に対応できるような人づくりを考えていかなければならないと思います。家庭や学校だけではなく、地域との関わりを感じながら、多くの人に見守られている環境で子どもたちがはぐくまれていくこと、そのような環境をつくっていくことが大切なのではないのでしょうか。

多様な人との関わり、多様な経験を積んでいくことにより、コミュニケーション力を身につけ、他者と関わることのすばらしさ、おもしろさを知り、同時に難しさも学んでいくことが大切です。人は決して一人では生きていくことはできません。そのことを、経験をもって知り、体得していくことができます。学力だけでなく、「生きる力」をはぐくんでいき、「心」と「体」をはぐくんでいかなければなりません。

「愛情」「ぬくもり」を感じ、誰かに「関心」を持たれていると感じることができれば、そうした経験があれば、大きくなっても、心に残り、心の糧となるでしょう。そして、そうした「愛情」「ぬくもり」「関心」を、還すことができる人になると思います。



世界にも通用する人材育成

将来を担う子どもたちに必要なもの、必要なことは何でしょうか。私たちにできることは何でしょうか。

国立青少年教育振興機構の「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」によると、子どものころの体験活動はその後の人生に影響するそうです。

主な調査結果として、

- ① 子供のころの体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多い
- ② 友だちの多い子どもほど学校好き、憧れる大人のいる子どもほど働くことに意欲的
- ③ 小学校低学年までは友だちや動植物との関わり、小学校高学年から中学生までは地域や家庭とのかかわりが大切
- ④ 年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や友達との遊びが減ってきているが挙げられています。

ここから考えられることは、体験の重要性、成長に応じた活動内容の必要性ではないでしょうか。また、家庭や学校、地域との関わりも重要です。ここで忘れていけないのは、「すべての子どもに豊かな体験を！」ということです。子どもたちの間に、格差が生まれえないような工夫をしていくこと、そして、どの時期にどのような体験をすることが効果的なのかを考えていくことが必要になってくると思います。このような視点に立って、以下のことを提案します。

①学校応援団の拡充～飛び出せ学校応援団！

子どもたちとの関係は、学校や家庭との関係(縦の関係)、友達との関係(横の関係)が生活の中心になっているが、そこに地域等との関係(斜めの関係)をプラスすることによって、学校以外(放課後)の生活が変わり、様々な人と関わることにより、体験が深まり豊かなものになっていくのではないだろうか。

学校が元気になるとともに地域や家庭のボランティアの方々も元気になるという相乗効果が期待できる「学校応援団」「放課後子ども教室推進」事業の拡充を図り、学校・家庭・地域社会が一体となって子どもの育成に取り組む体制づくりを地域住民と共に育む事が近道になると思う。

<方法>

県が推進している「学校応援団」を大きな受け皿にする。

◆学校応援団と放課後子ども教室との連携→学校内と学校外(放課後)をつなげる

- ① コーディネーターの連携
- ② ボランティアの連携
- ③ 活動場所の連携
- ④ 活動内容の連携
- ⑤ 研修(コーディネーター、ボランティア)の連携

◆拡充の活動例

- ・県のHP上に「学校応援団」を追加し、活動を県民に知らせることで質の向上と関心度アップを図る
- ・地域参観日を実施し、地域住民みんなで見守る学校となるような仕組みづくりにつなげる
- ・こちらやまなし学校応援団～よろづ相談ルーム～
保護者と学校の関係が円滑に行き、保護者・教員が安心して学校生活を送れるようにコーディネーターを中心とし、気軽に話をしたり、相談できるような環境にする

◆多様な体験の担い手

企業、大学、地域、保護者、NPO、団体←社会貢献、地域貢献

◆学校内に留まらず、既存の地域施設を活用し担い手・利用者共に参加しやすくする

◆体験例

①夏休みの自由研究支援

やまなし学校応援団などの地元ボランティアがスタッフとなり、夏休み自由研究の遂行を支援する。

☆対象者：小・中・高校生（児童・生徒のみの募集）

☆期間等：夏休み期間、1回／週

☆場所：地元学校を拠点にした活動（地元学校の教室、地域、文化施設等を利用）

☆支援内容：スタッフ1名と5～6人の児童・生徒グループが1つのチームを構成し、チームで研究活動を行う。

☆研究例：・古典や漢文の読解

- ・地元地域の再発見（名物、遊び場、危険な場所、人口構成、職業分布等）
- ・工作や裁縫
- ・動物、植物、太陽、星等の観察
- ・料理における新メニューの開発



②英語学習 - フォニックス学習 ～通じる英語を話そう！～

日本人は英語を読めても話をするのが苦手。英国の幼稚園、小学校で採用されているシステムを利用し、耳と口が柔らかいうちに26のアルファベットだけでなく、約40種類のフォニックス（発音）体得、正しく発音する。単語の70%はこのロジックで読めるようになる。

1. s, a, t, i, p, n
2. c k, e, h, r, m, d
3. g, o, u, l, f, b
4. ai, j, oa, ie, ee, or
5. z, w, ng, v, oo, oo
6. y, x, ch, sh, th, th
7. qu, ou, oi, ue, er, ar

習得方法

例) 1行目の読み方はス、ア、タ、イ、パ、ンヌ

これら6音を習得すると、sit, sat, pan, pin, tin などが読めるようになる。4行目は、エイ、ジ、オウ、アイ、イー、オー。ふたつのアルファベットをひとつのサウンドとして認識、boat, goat, tie など読めるようになる。

日本人が苦手とする音節を自然に理解、単なる暗記ではない読み方が習得できる。

③こども国際交流活動 ～小学校での英語活動をもっと楽しくする為に！～

小学校教育の英語必修化の背後には、グローバル化に伴う異文化理解の必要性があります。

英語が話せるようになってから国際交流するのではなく、外国についてもっと知りたい、だから英語を学びたい、世界史や地理についても学びたいと発想を逆転させる必要がある。

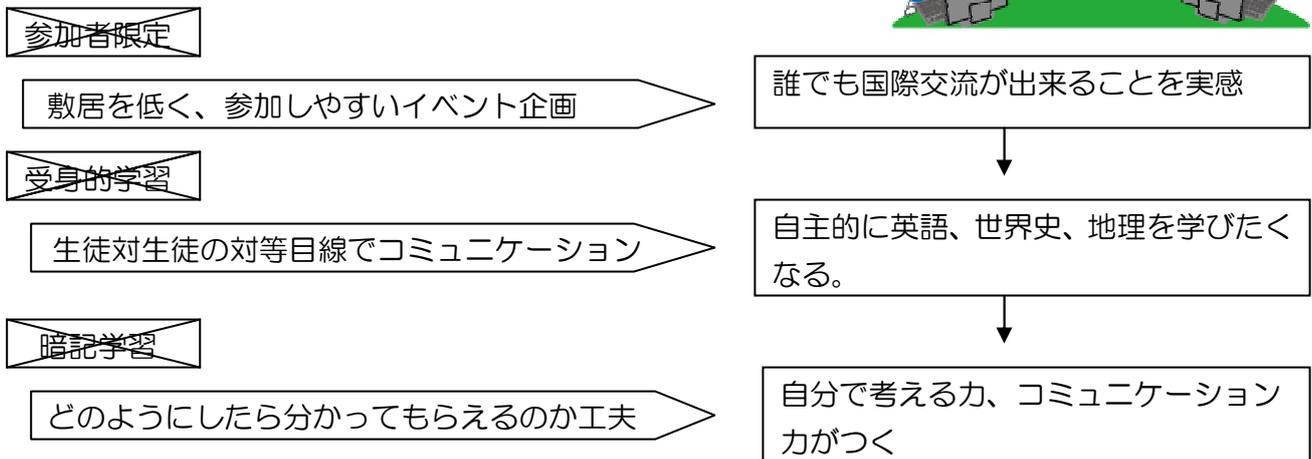
【例1】テレビ電話で海外の学校と異文化交流

スカイプなどのシステムを利用して海外校とのコミュニケーション
家族、学校、山梨、日本について調査、紹介

【例2】図書館、国際交流センターなどの施設を利用した留学生、在日外国人児童との交流 和文化紹介(日本語、お茶会、生花、クラフト)

ゲーム大会、料理教室など既存のイベントにこどもが参加しやすい工夫*

ポイント



④企業の職場体験

働く大人と接することにより、異世代とのコミュニケーション能力や豊かな人間関係を築き、仕事を行う上での心得・責任感・根気・積極性を学ぶ場として絶好の環境である。

特に地場産業を体験し、将来地域を守る子ども達の育成に努めることにより循環型社会の輪が作りやすくなる。

実施方法

- ①モデルカリキュラムの作成（社会人として身につけさせたい学習・企業毎の特性を生かした学習・タイムスケジュール等）
- ②協力企業の公開 → 県HP上に掲載
- ③受け入れ企業に負担をかけないように、傷害・賠償保険等は参加する生徒・児童側が加入する
- ④体験手帳の作成

⑤大学の出前講座、体験学習

大学と小学校・中学校・高校との連携

大学が小学校や中学校、高校の応援団になり、大学と小学校・中学校・高校との連携を深める。

(1) 大学の出前講座

大学が小学校や中学校、高校へ出向き、出前講座などを行う。

(2) インターシップ制度による連携

教職課程履修中の大学生による小・中・高校の授業の補助等、大学の授業と関連のある事項について、インターシップ制度を設ける。

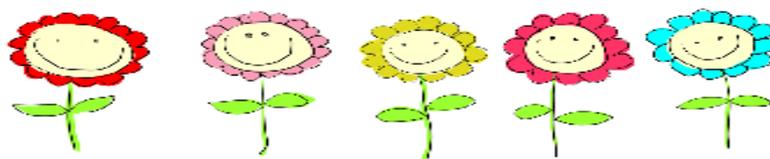
(3) 大学の見学

小学校や中学校、高校の必要に応じて大学見学を行う。

⑥心と体をはぐくむ体験

<例>ヨガ

- ・自然と遊んで五感をめいっぱい使おうイベント
- ・オリエンテーリングにプラスα
- ・茶道体験でメンタルケア
- ・展示
- ・メンタルケア



②担い手育成

子どもたちをはぐくむ『人』を育成していくことも重要なことだ。コーディネーターやボランティアの研修を連携しながら行い、一定の基準を保つようにする。

また、学校応援団等の無償ボランティアを一部有償ボランティアへと移行することにより、受け手もより高いサービスを受ける場合には負担が必要であることで保護者としての自覚を高め、担い手も生涯学習としてさらにスキルアップを志せる。

子どもたちが、体験したことを伝えたい(つなげたい)と思えるように、ボランティア等の担い手を素敵な大人だと思えるように、大人自身も高めていく必要があると思う。

みんなの情報

山梨県の教育施設、文化施設でも様々なイベントが行われたり、体験ができるような取組が行われたりしています。私たちが「あるといいな」「子どもが体験したら楽しいだろう」と考えていた取組は、すでに県立の施設で行われていたり、NPOや様々な団体で行われていることが検討会の中で分かりました。

実際には行われているのに、その事実を知らなかった、気が付かなかったということでは、もったいないと思います。行っていることを広く知ってもらうには、効果的に情報を伝えるにはどうしたらよいか、考えていくことが必要になってくると思います。

情報は、ただ闇雲に流すだけではなく、受け手を意識して発信していくことが大切です。そして、発信者側の工夫と同時に、受け手も能動的な受け手になることが必要です。発信者側の力(伝える方法、伝え方)、受け手の力(能動、主体性)が相まって、情報は共有化されます。共有されなければ、せっかくの情報が伝わらず、活かされません。この情報を元に受け手がどう活かすか、大事なことです。最大限に活かすことができれば、情報の受け手から、今度は情報の発信者になります。情報は次々に広がっていきます。

地域から、学校から、子どもたちから、家族から求められる姿の「まなびの情報」を築き、受け手を発信者にするすることで、情報は生きて成長し、活力ある人材を育む、広がりのあるものになります。

情報には次の要素が欠かせないと思います。

『適切』

いくら素晴らしい情報でも、受け手が理解しなければ意味がない

『時(タイミング)』

タイミングを逃してしまえば、その情報には意味がない

『人』

その情報を求めている人に発信しても意味がない

県民一人ひとりの個々のニーズに応じて、それぞれに発信することは難しいことです。それぞれが情報を取りやすい工夫をすることが大切なのではないでしょうか。

そのために、以下のことを提案します。

① 情報の共有化

施設がばらばらに情報を発信するのではなく、一箇所を見れば情報が載っている場所(情報の拠点)を作ったら分かりやすいのではないだろうか。「そこにいけば情報が手に入る」と思わせるような情報の集約と充実を図る。県や教育委員会のHPなどに情報の拠点を設け、より受け手に届く工夫をしていくことが必要ではないだろうか。

<例>

- 対象年齢ごと
- 目的ごと
- 実施日
- 実施場所(実施地域)

自分が必要な情報を見つけ、その情報を活かしていくことができる。

② 交流の場

HP上だけではなく、リアルな情報の拠点を設ける。あらゆる情報というわけにはいかないが、そこに行けば、情報を得ることができたり、相談しながら情報を広げていくことができるような場所、そして、人とも交流できるような場所があればよいのではないだろうか。受け手が実際に足を運び、主体的に利用するような場所と考えられる。

<例>

➤ 「思春期カフェ」の設置

思春期の親・当事者が利用できるカフェとして、予防は地域、治療は専門家と位置づけ専門機関に行く前の敷居の低いぴゅあ相談機関とどんな話でも気軽にできる場を提供することにより、孤独や不安解消の緩和、きめ細かなコミュニケーションを図る。

◇ 保護者向け：正しい情報と気軽に話せる場作り

→ワンコイン座談会・学習会の開催

◇ 当事者向け：第三者なら話せる相談や気軽に話せる・安心できる場作り

→県内大学生に協力依頼し、ぴゅあカウンセリング

- エゴグラムや性に関する知識をチェックできる「自分を知るコーナー」
- 思春期の悩みに対応。正しい性の知識や自己決定の大切さについても働きかける。
- どんな話でもスタッフが聞いてくれる「相談コーナー」
- 一人でも友達とでも自由に使える「フリーコーナー」
- スタッフ常勤による「寺子屋コーナー」

➤ 保護者の参加機会の拡充

保護者の多様な働き方、より充実した時間を持てるよう学習の機会を増やすためにも中学校区内の各小学校行事の参加を可能にし、地域社会への愛着を高める。また、参加機会が多くなることにより保護者同士の交流も生まれ、コミュニケーション不足も要因のひとつと言われる中1ギャップを親子で軽減していく。

➤ 地域住民による地域住民のための生きる力をはぐくむ機会の創出

登録講師の情報を一元化し、広範囲にわたった生きる力をはぐくむ機会を設ける。

③ 学校教育との連携を向上させる活用事例集の作成

教育施設や文化施設を利用するときに、オーダーメイドのプログラムは、学校側に明確なビジョンがある場合は非常に効果的であると思う。しかし、社会科見学の一環という位置づけの場合は、学校側(教師)も恒常的に忙しく、打ち合わせや準備に多くの時間を割くことは難しいという現状があるのではないだろうか。引率するだけで手いっぱいということになりかねない。このことが利用の減少、効果的な利用の妨げになる等のデメリットにならないように、学校との連携を充実させていくことが必要だと思う。

活用事例集を作成することにより、学校と施設との連携が強まり、また、よりよい活用のアイデアを県内で共有することができるようになるのではないだろうか。

④ 子ども学芸員の育成

子ども学芸員を養成し、情報の受け手ではなく、子どもを情報発信する側に取り込む。

<子ども学芸員の例>

- ◆郷土学習の自主的な取組である「ふるさとやまなし」を活用した調べ学習を、継続的に行える取組とするためにも、コンクールにとどめず、参加した子どもを子ども学芸員とする。
- ◆山梨県の歴史や文化、博物館や美術館に興味・関心のある子どもたちを募集し、子ども学芸員とする。
- ◆「夏休みフリーパスポート」を利用し、参加スタンプを集めたら、子ども学芸員とする。

博物館・美術館の表側の社会科見学だけではなく、バックヤードツアーなど、「学芸員の仕事」に焦点を合わせたプログラムは、職業体験としての側面からも利用価値が高い。展示物を見る目も変わってくる。実際に展示物にさわること、どうして普段「手を触れてはいけない」のか、身を持って知ることができる。

魅力を伝える仕事を体験し、パウチ証(ナンバリングしてあれば学校把握できる)を持って大人をつれてきたら子ども学芸員はスタッフとして無料、(大人は有料)などの特典をつけ、こどもが保護者を誘ってきて、こどもが大人に教えるという逆転のコミュニケーションが生まれれば家族のきずなも深まる。

年間通しての職業体験と、資格を通して学ぶマナーや教養の意味、保護者から始まり、知らない人へもガイドを通して肯定的に受け入れられる、コミュニケーションの充実も狙うことができる。



みんなの新図書館

現在、新県立図書館の整備が順調に進んでいます。それに伴い、すべての県民のための図書館となることができるよう、図書館のサービスや運営などのソフト面を充実させるための計画も考えていかなければなりません。また、ソフト面の充実において、「成長する図書館」という新県立図書館整備にあたっての基本方針を実現しなければなりません。

新県立図書館がモデルケースとなり、他の県内の図書館に提供できるような革新的な事業やサービスを発案していくことが必要になってきます。

ただ単に、本がある場所ではなく、いろいろな世代の人が集まる交流の場であり、あらゆる情報が集まる場所でもあるのだと思います。日々、動きがあり、成長する施設、それが新図書館ではないでしょうか。

そのために、以下のことを提案します。

① 案内ボランティアの育成

新県立図書館ということで最初はその利用方法に戸惑う来館者も多いのではないだろうか。また、本を読むことに慣れてない人は、どの本が面白い本なのか、自分に有益な本はどれか、というように、本の選択に苦労する人も多いのではないか。

「利用方法がわからない」「本を読みたくてもどんな本を読めばいいのかわからない」、そのような来館者のためのサービスを提供していくことも必要ではないだろうか。

また、新県立図書館は、県の各文化施設と連携し、それらの情報の発信地となることを目標としている。そこから、来館者に対し、図書の利用の場としてだけでなく、県内の様々な情報収集の場として利用してもらえるような働きかけが必要ではないか。

来館者に満足いただける対応方法や来館者に図書を案内できるまでの知識を磨くための講習を受講した、来館者への対応をするボランティア『図書館コンシェルジュ』のような人材を育成する。

また、来館者に与える情報が図書館の利用方法や書籍の情報に留まるのではなく、県内のイベントや情報を与えたり、情報の検索方法を教えたりすることができる『情報コンシェルジュ』のような人材も育成する。

② 教育ボランティアの募集

図書館内に設置される読み聞かせコーナーやボランティア活動室を利用して、幼児から児童の来館者を中心に彼らの読書や学習をサポートできる家庭教師のような役割を果たすボランティアを募集する。ボランティアの数にもよるが、時間単位の登録制で活動を依頼するのが望ましいのではないだろうか。

ボランティアの対象は学生に限定せず、意欲のある者を優先する。若い世代にとっては、社会活動経験を積む機会となり、経験を積んだ世代にとっては、その経験を伝える機会にもなる。ここでの活動が有意義であれば、伝えられた子どもたちが、やがて、伝える側(教育ボランティア)になるのではないだろうか。そのような理想的なサイクルになることができればと思う。

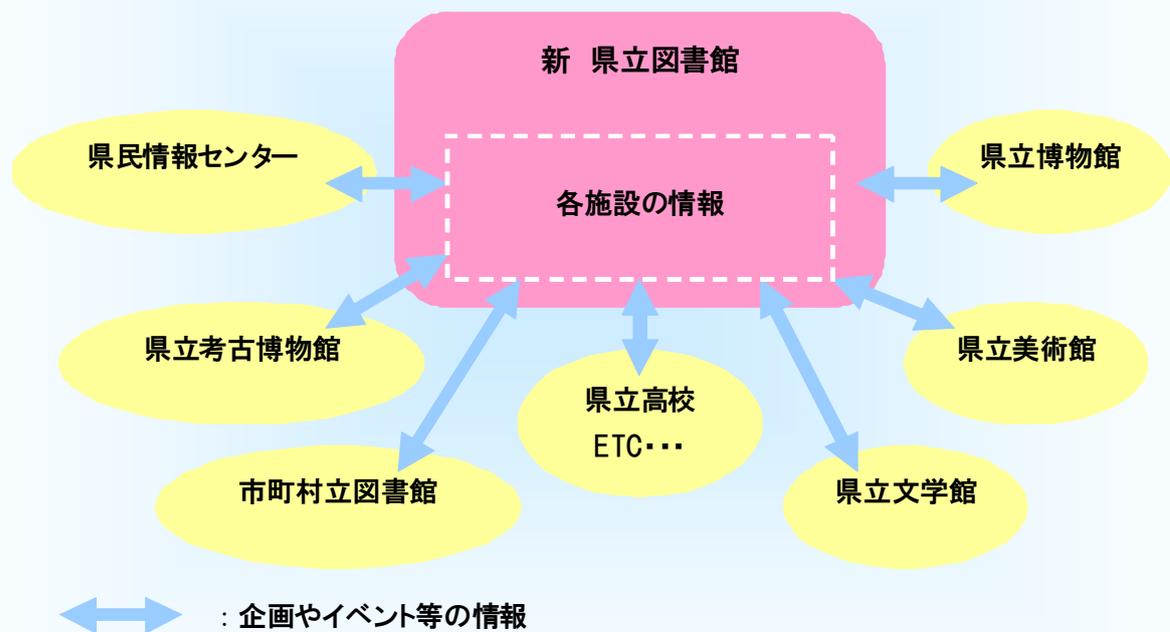
子どもたちを教育ボランティアの手に委ねることにより、大人が本をゆっくり選んだり、読書の時間が持つことができるようになり、子どもにとっても大人にとっても利用しやすく、有意義な時間を過ごすことができる価値ある施設(図書館)になるのではないだろうか。

③ わかりやすい情報提供

県民の誰もが使用でき、利用しやすい図書館を目指すために情報サービスの充実を図ることが重要だと考えられる。県内の他の文化・情報施設との連携を図っていく等の工夫が必要になってくる。

図書館のHPにアクセスすれば、イベント情報を入手できるような工夫をし、図書館を利用する人がイベント情報を入手しやすいようにする。

<例> 新県立図書館の情報ネットワーク (イメージ)

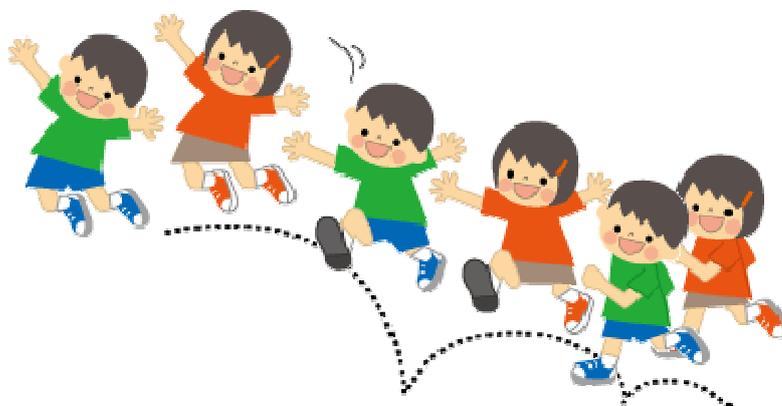


おわりに

検討会を重ね、自分たちでもいろいろなことを調べていく中で、山梨県では「教育」に関する様々な取組を行っていることがわかりました。しかし、残念なことにその取組が多くの人には知られていないこと、共有できていないことも分かってきました。また、学校応援団の取組のように、私たち県民が関わることができる機会があるのに、活かされていないこと、地域によって差があることもわかりました。

私たち大人ができることは何でしょうか。子どもたちが安心して育っていける社会にすることと、積極的に関わることではないでしょうか。

多くの人が子どもたちを見守り、関心を持つことが必要だと思います。「心にかける」「目にかける」「言葉をかける」「手をかける」ことが大切です。人と人とがつながり、学校とつながり、地域とつながり、そのような社会の中で子どもたちをはぐくんでいくことこそが、未来にむけて私たちができることなのだと思います。



やまなし女性の知恵委員会 はぐくむグループ 委員一同



軽部妙子 杉野美幸 竹内朱有子 富樫ひとみ 中込絹 横山陽子
(五十音順)